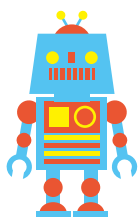


シニアライフの過ごし方

インタビュー 第2回



「おもちゃドクター」をご存じですか？

その名のとおり壊れたおもちゃを原則無料で修理し、元気にするボランティアです（部品代を100～200円程度いただく場合あり）。

定年退職後の人たちがメインとなり「おもちゃ病院」で活躍しています。

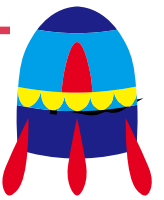
今回、全国組織である日本おもちゃ病院協会（以下、協会）さんにお願ひし、戸田市で開院している上戸田おもちゃの病院さん取材しました。

上戸田おもちゃの病院は毎月第2土曜日と隔月第4土曜日の11時～15時、上戸田地域交流センター「あいパル」の一角で開院している。

11月の開院日、開院時間の前に会場に伺うとおもちゃドクターのトレードマーク、青いエプロンをつけた人たちが既にテーブルにたくさんの道具を広げてスタンバイしていた。



会場風景。この日は3F多目的ホールだったが、いつもは1Fホールで開院しているそう。



この日来ていたドクターは全部で12人。このほか、あいパルの職員3名が受付を担う。ドクターは持ち込まれる患者を時間いっぱい、次々と治療していく。

ちなみに、おもちゃ病院では持ち込まれたおもちゃを「患者」、修理を「治療」と呼ぶ。その日のうちに治らないものはドクターが持ち帰って治療、これは「入院」だ。原則その日のうちに治療するようにしているが、難易度が高いものや時間がかかるもの、閉院間際に持ち込まれたものは入院になるという。

11時。開院するやいなや最初のお客さんが来院し、それを皮切りにひっきりなしに患者がやってくる。

午前中のうちに治療依頼が舞い込み、ちょっと落ち着いた後、14時頃に今度は引き取りで来院する人が増えるそうだ。それでもここはまだ穏やかな方なのとか。



受付で症状をヒアリングし、カルテを作成する。

本日最初の患者はクリスマスの装飾を施した機関車のおもちゃ。持ち主が20年くらい前に息子さんに買ったもので、孫にも使ってほしいので動くように治してほしいという。

治療はただ治せばよいというものではない。「おもちゃって人それぞれ思い入れがあるじゃないですか。だからそういうのはちゃんとお聞きした上でやらないと。例えば部品を取り換えて外見が変わってしまう事もあるでしょ？ そうなってもいいかどうか、とかね」

そう教えてくれたのはこの病院のリーダーを務める佐藤さん。

確かに、自分の持っているおもちゃに何の思い出もない、という人はいないだろう。それは子供も大人も同じである。協会の副監事を務める田中さんが、印象に残っているエピソードを語ってくれた。

「ある女性が置時計を動くように治してほしいって持ってきたんです。普通の置時計だったんだけど、治したら『ううっ…』ってボロボロ泣き出して。聞けば亡くなった旦那さんが退職記念にもらったもので、形見なんだと。置いておだけじゃなくて、時を刻んでいてほしかったんでしょねえ。治療して泣かれた事は何回かあります」



上戸田病院のリーダー、佐藤さん(左)とベテランドクター、高村さん(右)。同じ頃にドクターになり、もう6年以上。他の病院でも一緒になる事も多く仲良し。

そんな持ち主の思いを大切にするため、ドクターたちはあの手この手で治療にあたる。道具はすべて自前、1人平均して7、8kgの荷物を携えてやってきており、中には15kg、20kgになる人もいるという。

治療法も人それぞれ。例えばプラスチック製の脚が折れたのであればただ樹脂でくっつけるのではなく極細のワイヤーでガッチリつないでから樹脂で固めるなど、また壊れる事がないようにするのだ。

「前に来たおもちゃがまた治療に来る事もあるけど、『俺の治したところはもう壊れねえぞ！ほら壊れてないだろ！』と胸張って言える治療を心がけています（笑）」と高村さん。

また、ドクター同士和気あいあいとしており、情報交換も盛ん。治療法に迷うものは相談したり、自分よりもその分野が得意な人がいたらお任せしたり、連携をとる事で確実に治療している。

傍からみれば人のために活動するボランティアの鑑であるが、ドクター自身は「自分のため」と言う人が多い。高村さんはこう語る。

「僕は元々コピー機の営業マンだったんです。定年退職後、しばらく家でダラダラしていたんですけど、協会の会長をしている三浦さんがラジオでおもちゃドクターの紹介をしているのをたまたま聞いて。それですぐ調べて申し込んだのがきっかけです。すっかりハマっちゃって、全然飽きないんですよ。一定の治し方みたいのはあるけど治療はあくまでドクターに任されていて、とにかく頭を使う。1日に7、8個治したらもうヘロヘロ。いいポケ防止ですよ（笑）」

ドクターになって7年、御年71歳の山田さんもこのボランティアは自分のためと言い切る。「引きこもっているとね、病気にならないかばかり気になってますます病気になる。こういう活動をしていると熱中してそんな事考えている暇がない。子供たちが喜んでくれるのも嬉しい。元々メーカーでメンテナンスサービスをやっていて、仕事柄、電気電子関連には明るかった。他のみんなもそれぞれ経歴も得意な分野も違うから色々、視野が広がって良い」

穏やかでどこか仙人ぽさを漂わせる田中さんも同様だ。

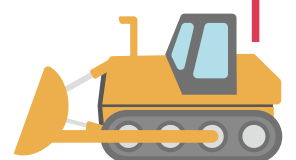
「楽しんでやれて、時間もエネルギーも注げる贅沢な趣味です。ボランティアだからもちろん収



テーブルいっぱいに道具が広がるが、ほんの一部。ドクターたちは「重い荷物の持ち運びはいいトレーニングになる」とポジティブだ。



「これはこういう状態」「こう治療していこうかな」「自分ならこうするかな」「そういえばこの前こんな患者がいてさ…」会話も経験値。



入にはならないんですけど、自分の満足のために時間もお金（会場までの交通費や道具代）も使っている。レストランで自分の好きなものを食べるのと同じで矛盾はないです」

ドクターたちはみんな多かれ少なかれ、お客さんの喜ぶ姿を見るのをモチベーションにしている。田中さんにとってはそれは「収入以上の魅力」だという。

そんな粋なドクターたちはこの日 35 件の治療をこなし、5 件の入院患者を受け入れた。最後に、山田さんと田中さんに定年後の生活についてアドバイスを伺った。

山田さんはとにかく現役のうちに動けと話す。

「仕事で培ったものって、定年後生きていく上でひとつの手段になると思いますよ。例えば町内会の活動。近所のごみ拾いとかあるでしょ。建設業の人だったらリヤカー使ったり、廃棄物処理業者を手配したりってやってきているじゃないですか。現場の人じゃなくても、ゼネコンにいた人は勝手がわかっていると思うんだよ。ホワイトカラーはマネジメント力とか、PC 使えるのも強みだよ。エクセルで計画表作ったり、説明用のスライドをパワーポで作ったり。最近そういうの結構喜ばれるみたい。仕事はいっぱいある。そういう考え方で色々できるんじゃないかな。でも定年後いきなり町内会に入って『はい僕何でもやります』って言ってもストレスになるかもしれないから、会社にいるうちから少しずつ参加しといた方がいいかな。

趣味も、現役のうちから作るのが一番いいですよ。特に男性は定年迎えてから新たにやるのって難しい。何かの教室に入っても素直に教えてくださいといづらいし、本を読んでもわからない。仲間がいないとダメなんだよね。1人でできる趣味もあるけど、限界が来たり飽きちゃったり。まあそんな訳で、会社にいるうちから『何しよっかな』って考えておいた方がいいですね。50 歳じゃ遅いな、40 歳過ぎて介護保険料払い始めたら、退職金の使い道とかライフプランとかと併せて考えた方がいいですよ」

田中さんは、自分のこの活動との出会いに思いを馳せ、メールを送る。

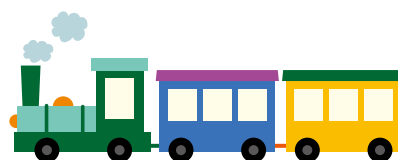
「僕は以前中学校で理科を教えていて、もう昼も夜も土日すらないような生活で『ボランティアなんかとでも…』という状態でした。だから若い頃は暇になったらどれだけいだろうって思っていた。でも、それは違うね。楽しくてやりがいがあって忙しいのが一番です。そういうものとの出会いって縁だし、人によって違うから、なかなか『こうすれば?』とは言えないけど、自分の意志で見つけて、邁進して、忙し



現役の時から準備が重要と語る山田さん。



定年後の過ごし方について語る田中さん。



さを楽しんでください。定年が65歳で、その後平均寿命まで生きるとしたら、20年以上ある訳じゃないですか。生きがいを求めるチャンスですよ。『やる事がなくて』なんてもったいないです。宝の時間ですよ」

興味を持たれた方、ボランティアにはこだわっていないけど何かしら活動をしたい方は一度協会HPを覗いてみてはいかがでしょうか？もちろんおもちゃを治療してほしい方も。ハートフルなドクターたちがあなたを出迎えます。

取材者 (株) 星和ビジネスリンク 関

もっと知ってほしいおもちゃドクターの世界



ドクターが持っているのは何と100円ショップの爪やすり。接触不良になっている基盤を磨くのに使えるのだそう。治療の知恵はそこかしこに。

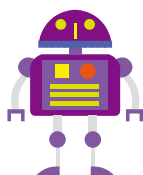


「あいパルでは職員さんが受付をやってくれる。おかげでみんなが治療に集中できるようになって、助かってます」と高村さん。立派なメンバーだ。



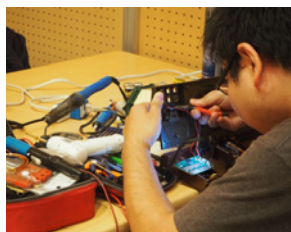
あいパル職員さんおすすめ、キッズスペース！寄贈されたおもちゃがドクターに治療され、使われている。

おもちゃドクターになるには…？



独学で学んで実践、というのももちろん可能ですが、治療や道具の基礎知識の習得、どこかの病院に所属したい場合のネットワークを考えると、やはり協会主催の養成講座を受けるのがおすすめ。定期的で開催されています。

<https://www.toyhospital.org/semi>



現役世代の方も活躍しており、ドクターに年齢制限はない。「子供の頃から機械いじりが好きでラジカセとか分解して遊んで」と三上さん(右)。人形の腕を縫っていたのは林さん(左)。「得意分野という訳ではないけど、人形を治すのは好き。人形は生き物のような気がして。その生き物がまた元気になるんだと思ったら、ちょっと嬉しい」

気になった方はアクセス！

日本おもちゃ病院協会……………<https://www.toyhospital.org/>

上戸田おもちゃの病院……………<http://www.ipal-friendship.net/lecture/event/266/>

上戸田おもちゃの病院 Twitter……………https://twitter.com/kamitoda_omotya